

2025年度

郁文館高等学校 一般試験

国語

時間50分・100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入すること。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入すること。
記入方法を誤ると得点にならない。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも回収される。

郁文館高等学校

次の文章を読んであとの問いに答えよ。

ここでわたしは、高校一年のときに①もつとも決定的な影響をわたしに与えた一人の若い教師について、語らなければならぬ。

上田正行というその教師は当時まだ教育大文学部の大学院生で、**a** 二葉亭四迷について長大な論文を執筆中であると、最初の授業のさいに自己紹介した。それから、教壇に立つのはこれが最初であるとも。彼は指定された現代国語の教科書を手にとり、目次を一瞥すると、いかにも馬鹿にしたように、②「こんなつまらないものはやめて、来週からはぼくが教を準備しましょう」といって、そのまま出て行ってしまった。生徒たちは全員、**b** 呆氣に取られたまま、翌週を待つことになった。

次の授業のとき③上田さんは、おそらく週末を潰して準備したのだろう、藁半紙にガリ刷りしたプリントを山ほど抱えてきて全員に配り、一番前の生徒にむかってそれを朗読してみるように命じた。「言葉なんかおぼえるんじゃないやなかった」。指名された生徒はわけもわからずに朗読した。

「どうだい。すばらしいだろう」と、上田さんはいった。「これは田村隆一の『帰途』という詩だ。意味がわかるかい？」
「少しもわかりません」と、生徒が答えた。「言葉がなかったら、人間でなくてサルになってしまいます」と彼が付け加えると、教室の全員が笑った。

調子の狂った上田さんは、その後ろの生徒に次の詩を読むようにいった。「おれは大地の商人になろう」と、彼は怒鳴るように大きな声で谷川雁の「商人」を読み終えた。そしてその後で、聞かれもしないのに「さっぱりわかりません」と答えて、教師を悲しませた。三番目の生徒が読まれたのは、岩田宏の「感情的な唄」という作品だった。学生、糊、ポリエチレン、酒、バックル、為替といったぐあいに、自分の嫌いなものを列挙していき、次にバス停留所、古本屋、猿、ポリ指と、逆に好きなものを列挙していくだけの、きわめて簡単な構造をもった詩だった。これにはようやく生徒も「面白い」と積極的な反応を見せた。上田さんは④いかにもホツとしたような表情になった。このあたりでチャイムが鳴り、二回目の授業は終了した。

田村隆一、谷川雁、岩田宏……。上田さんが生徒たちに教えようとしたのは、自家製の現代詩のアンソロジーだった。彼はそれを一通り終えると、谷川俊太郎の『二十億光年の孤独』や金子光晴の『女たちのエレジー』から作品を選んできてはガリ版で印刷し、生徒たちに読ませた。生徒たちのうちおよそ半分は、これまで小学校や中学校で見知ってきた詩なるものとあまりに違っているこうした現代詩を、まったく受け付けようとしなかった。残りのうち半分は、この新任教師の過激な実験的授業に対して、いったいそれが国語の能力にどう関係するのかわからない調子で、反撥に近い反応を示した。わたしを含めて教室のなかの四、五人の生徒だけは、はじめて身近に接することになる、日本のもつとも新しい詩なるものに深い関心を抱いた。配られたプリントが、その年になって思潮社が刊行を開始した現代詩文庫の刊行順に、一人一編ずつ選びだして作ったものであることをわたしは知ったのは、ずっと後になってのことだった。

わたしは素朴に田村隆一が書き付けた「血」とか「夕焼け」という言葉に、これまでまったく知らなかった新鮮な感情を発見したような気がした。谷川雁の詩は晦渋であつたが、谷川俊太郎が自分とほぼ同じ年齢のときに愛犬の死を謳った「ネロ」という作品には、素直に共感できると思った。詩とはこんな風に、⑤隣にいる人間に息を吹きかけるまでに身近に書いていいのだなという、奇妙な安心感を抱いたのである。こうして一学期の国語の授業は進行していった。二学期になると、上田さんは「今度は現代の小説を読もう」と教室で突然に提案し、大江健三郎の短編『死者の奢り』を教材にして、輪読を開始した。サルトルからノーマン・メイラーまで、さまざまな文学者の名前が、彼の口から漏れた。わたしがただちにこの未知の小説家に夢中になったことは、いうまでもない。

六〇年代の末には、難解であることが、芸術作品の価値を定めるさいに、もつとも重要な判断基準であるといった風潮が蔓延していた。フェリーの『8 1/2』が難解であるように、ジョン・コルトレンのジャズは難解であり、埴谷雄高の『死霊』はことさらに難解であるとされていた。それはこうした作品が芸術として優れているという意味であった。八〇年代以降の芸術が、もっぱら面白いか、面白くないかという基準のもとに判断されるようになったのと比較してみると、これは⑥興味深い現象であつたといえる。年少者の幼げなスノビズムを擽るには、とりあえず難解な事物に就くことが一だった。わたしの級友のなかには、わたしがアートシアターの映画館に通っているのを知って、それは高校生には難解だからやめておけよと、わざわざウ老婆心めいた忠告までしてくれる者さえいた。

今にして思えば、こうした形で現代詩に接することができたのは、個人的にきわめて幸福なことだったと思う。というのも、上田さんのおかげで、現代詩を一度も難解なものだと勘違いせずにすんだからである。現代音楽、現代俳句、現代絵画……といったぐあいに、日本では「現代」という形容詞が被せられたとき、芸術はかならずといってよいほどに難解であると風評され、ごく少数の（選ばれた）マイノリティの愛好家の所有物に帰して、その狭いサークルの域を出ることがないというのが、戦後の日本文化のあり方だった。わたしは幸運にして、こうした⑦「現代」が引き寄せてしまうマイナーな難解さの神話から、最初から自由な場所にいたように思う。その意味で上田正行という教師から受け取ったもの大きさは、限りのないものがあつた。

上田さんはこの一年で高校の教壇に立つことを止め、論文執筆に専念すると宣言した。けれどもわたしたちの学年の何人かの生徒との絆は、そのまま続いた。国際反戦デーのdガイトウデモに参加したわたしの同級生が、鞆も財布もなくしてしまい、深夜に何時間も歩いて彼の下宿先を突然に訪れたときにも、いとも平然と迎え、闘争を励ますといったeド

リヨウの広さをもっていた。一九七〇年の暮れに、わたしたちの学年の卒業文集編集部が原稿を依頼したとき、彼はもう高校での授業からはすっかり遠のいていたにもかかわらず、気さくに執筆をfシヨウダクした。

(四方田犬彦『ハイスクール1968』より・出題の都合上省略・改編した箇所がある)

語注

- ・アンソロジー：詩歌・文芸の選集。
- ・晦渋：言葉・文章が難しく、意味のとりにくいこと。
- ・輪読：何人かが順番に一つの本を読み、解釈・研究すること。
- ・蔓延：はびこりひろがること。
- ・スノビズム：上品ぶったり、教養のあるふりをする態度。
- ・マイノリティ：少数派。
- ・マイナー：小規模。

〈設問〉

問一 〓 線部a「二葉亭四迷」とあるが、彼の作品を次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えよ。

ア 雪国 イ 刺青 ウ 舞姫 エ 浮雲 オ 草枕

問二 〓 線部b「呆氣あひけに取られた」・c「老婆心」とあるが、どういう意味か。その意味として、それぞれもつともふさわしいものを次のア～エの中から一つずつ選んで、記号で答えよ。

b「呆氣に取られた」

c「老婆心」

- ア 拍子抜けしてやる気を奪われた。
- イ まるでわけがわからなくなった。
- ウ もう仕方がないと完全に諦めた。
- エ 意外なことに驚きぼんやりした。
- ア 見下しあざ笑うような皮肉。
- イ くだいほど世話をやく親切。
- ウ 経験豊かな先人からの教え。
- エ 非常に的を射た的確な助言。

問三 〓 線部エ・オ・カのカタカナを漢字に直せ。(ただし、楷書で丁寧に書くこと)

問四 〓 線部①「もつとも決定的な影響」とあるが、他の多くの生徒たちと違い、筆者が「影響」をうけたことがよくわかる部分を文中から六十五字以内でさがし、はじめとおわりの五文字を書き抜いて答えよ。

問五 〓 線部②「こんなつまらないもの」とあるが、上田さんは、教科書をどのようなものだと考えているか。その説明として、もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 大学院で文学を専門的に研究している自分にとってはあまりに低レベルで「つまらないもの」
- イ 高校で学ぶ生徒たちがまったく興味を示さないような古くさく教訓めいて「つまらないもの」
- ウ 本当の国語のすばらしさを生徒たちに伝えられるような新鮮な作品のない「つまらないもの」
- エ 学力の低い高校生にとっては非常に難しく授業に使っても理解のできない「つまらないもの」

問六 〓 線部③「上田さん」とあるが、筆者はどういう気持ちでそう呼んだのか。その気持ちとして、もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア まだ大学院生であり、年も離れていないので素直に「先生」と呼べないなとからかう気持ち。
- イ 教壇に立つのはこれが最初であると聞いて「駆け出しの教師」だと考えて馬鹿にした気持ち。
- ウ 他の先生たちとは区別して呼ぶことで彼に対する尊敬の念と親しみを示したいという気持ち。
- エ 現在は当時の「先生」よりも年上であるため恥ずかしくて「先生」とは呼びたくない気持ち。

問七 〓 線部④「いかにもホツとしたような表情になった」とあるが、なぜか。その理由として、もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 教科書を否定してまで自分が伝えたかった現代詩の面白さがようやく生徒たちに理解されたから。
- イ 生徒の理解を得て、自分の授業に対する生徒たちの不満や反撥がいくらかでも減ると考えたから。
- ウ 生徒たちの国語力のレベルにあった詩を発見することができ、今後の授業に役立つと考えたから。
- エ 「わからない」としか答えなかった生徒たちとやつのことでコミュニケーションが取れたから。

問八 〓 線部⑤「隣にいる人間に息を吹きかけるまでに身近に書いていいのだなという、奇妙な安心感」とある

がどういう意味か。その説明として、もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 多くの人に理解してもらおう必要はなく、限られた近しい人間にだけ理解できればいいのだという安心感。
- イ 現代詩はとにかく難解なものではなくてはならず、周りの誰にでも理解できるものではないという安心感。
- ウ 現代詩は難解なものと思われがちだが、身近な人・出来事を題材にしてもかまわないんだという安心感。
- エ 多くの人に理解してもらうためには、周りの人に話しかけるように世に広めていけばいいという安心感。

問九 ——— 線部⑥「興味深い現象」とあるが、なぜ「興味深い」のか。その理由を文中の語句を用いて五十字以内で説明せよ。

問十 ——— 線部⑦『現代』が引き寄せてしまうマイナーな難解さの神話から、最初から自由な場所にいた」とあるが、筆者はなぜそう考えているのか。その理由がよくわかる部分を文中から二十五字でさがし、書き抜いて答えよ。

問十一 この文章から読みとることのできる「上田さん」の人物像として、もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 次代や生徒の行く末を見抜く眼力によって仕事をこなす教師であり、さっぱりと明るくてささいなことにこだわらない、包容力に富んだ人物である。
- イ 教師でありながら生徒のことを顧みないで教材を変えてしまう身勝手さがあり、すべてを自分の価値観で決めつけてしまう自己中心的な人物である。
- ウ 教壇に立つことをあっさり諦めてしまう優柔不断な教師で、自分自身の研究に没頭すると生徒のことが見えなくなってしまう視野の狭い人物である。
- エ 教師として生徒に時間を費やす熱心さがあっても最後には論文執筆の道を選択するように、自己の適性を客観的に判断できる冷静な人物である。

次の文章を読んであとの問いに答えよ。

自然環境を経済学的に考察しようとするときに、(a) 留意しなくてはならないのは、自然環境に対して、人間が歴史的にどのようなかたちで関わりをもってきたかについてである。この問題は、広く、文化をどのようにとらえるかに関わるものであって、①狭義の意味における経済学の枠組みのなかに埋没されてしまつてはならない。「文化」というとき、伝統的社會における文化の意味と、近代的社會において用いられる意味との間に(I) な差違が存在することをまず明確にしておく。この問題について重要な視点を与えたのが、アン・ハイデンライヒとデヴィッド・ホルマンの論文「売りに出されたコモンズ——聖なる存在から市場的財へ」である。ハイデンライヒとホルマンは、文化について、二つの異なった考え方が存在することを指摘する。伝統的社會では、「文化」はつぎのような意味をもつ。「社会的に伝えられる行動様式、技術、信念、制度、さらに一つの社會ないしはコミュニティを特徴づけるような人間の働きと思想によって生み出されたものをすべて含めて、一つの総体としてとらえたもの」を意味する。他方、近代社會においては、「文化」は「知的ならびに芸術的な活動」に限定して考えるのが(II) である。マサイ族の若者が「文化」というときには、同年代の若者たちのことを想起し、伝統的な制度のもとで、社會がどのように組織され、自然資源がどのように利用されているかに思いをいたす。(b)、北ヨーロッパの人々が「文化」というときには必ず、芸術、文学、音楽、劇場を意味している。環境の問題を考えると、宗教が中心的な役割を果たす。宗教は、自然を創り出し、自然を支配する超人的な力の存在を信じ、聖なるものをうやまうことだからである。自然と人間との間の相関関係が具体的なかたちで表現されるのは、自然資源の利用という面においてである。伝統的社會では、人やものの可動範囲がきわめて限定されているため、生活を営む場所での利用可能な自然資源に頼らざるを得ない。(c)、これらの自然資源の涸渇はただちに、伝統的社會の存続自体を危うくする危険を内在している。伝統的社會の文化は、地域の自然環境のエコロジカルな諸条件にかんじて、くわしく深い知識をもち、エコ・システムが持続的に維持できるように、その②自然資源の利用にかんする社会的規範をつくり出してきた。自然資源の利用にかんじて、長い(III) な経験を通じて知識が形成され、世代からつぎの世代に継承されていった。自然環境にかんする知識と、その世代間を通ずる伝達によって、文化が形成されると同時に、文化によって新しい知識が創造されてゆく。何世代も通じて知識が伝達されてゆくプロセスで、社会的制度がつくり出される。そして、日常的ないし(IV) な生き方が、社会的制度として確立し、一つの文化を形成することになる。③自然と人間との間の相関関係がどのような形で制度化されるかによって、人間と人間との間の社会的な関係もまた規定されることになる。どのような自然資源を、どのようなルールにしたがって利用すべきかが文化の中心的な要素となる。したがって、年長者の教示ないしは指示に重点が置かれ、自然資源の利用は、社會のすべての構成員に対して公正に、また利用可能となるような配慮が、どの伝統的社會についても充分に払われている。伝統的社會では、自然環境にかんする知識は、スピリチュアリティとの関連において形成されている。(d)、シャーマニズムは、三千万人を超えるアメリカの先住民族たちが信じていた宗教であったが、それは、自然資源を管理し、規制するためのメカニズムであつて、その持続的利用を実現するための文化的伝統であつた。伝統的社會では、自然資源を持続的なかたちで利用するのは、また将来の世代だけでなく、他の伝統的社會を考慮に入れて、自然の保全をはかつてきた。④人間の「あ」が自由になるとともに、文化、宗教、環境の「ア乖離」は拡大化されていった。とくに、ヨーロッパ諸国によって、アフリカが植民地化されるプロセスを通じて、資源の搾取がより広範な地域でおこなわれるようになり、伝統的社會のもつ、それぞれの限定された地域に特定化された知識は無視され、否定されていった。アフリカ以外の大陸でも事情は同じであつた。伝統的な自然環境と密接な関わりをもつ知識は、經濟發展の名のもとに否定され、抑圧されていった。ハイデンライヒとホルマンの論文で、⑤近代キリスト教の教義が、自然の神聖を汚し、伝統的社會における自然と人間との乖離をますます大きなものにしていった経緯がくわしく論じられていることは興味深い。キリスト教の教義が、自然に対する人間の優位にかんする論理的根拠を提供し、人間の意志による自然環境の破壊、搾取に対してサンクションを与えた。と同時に、自然の「イ摂理」を研究して巧みに利用するための科学の發展もまた、キリスト教の教義によって容認され、推進されていった。ルネッサンスは人間の復興であつたが、それは自然の「ウ凋落」を意味していた。近代思想の發展はさらに、人間の優位を確立し自然の従属性に⑥「い」をかけた。フランシス・ベーコンにとっては、すべての創造物は人間との関係においてのみ意味をもち、自然は天からの賜物であつて、物理学と化学を中心とした科学の發展を通じて、そのゆたかな収穫を搾取されるものにならない。ルネ・デカルトはさらに極端なかたちで論議を進めていった。デカルトの機械論的、決定論的世界観にもとづけば、自然は⑦「数学的な法則」にしたがって動く存在であり、自らの意志をもたず、(V) な存在にすぎない。自然の価値は、人間にだけだけの効用をもたらすかによつてはじめてはかることができるかとされていた。自然を抑圧し、搾取することに対してなんら制約条件はもうけられるべきではない。

(宇沢弘文『経済学は人びとを幸福にできるか』より・出題の都合上改編・省略した箇所がある)

語注

・コモンズ：共同で利用・管理される土地。 ・コミュニティ：地域社会・共同体。 ・マサイ族：ケニア南部からタンザニア北部に住む民族。牛の牧畜を主な生業とする。 ・スピリチュアリティ：宗教的な意識・精神性。物質を超える精神的・靈的次元に関わろうとする性向。 ・シャーマニズム：シャーマン（宗教的職能者・神や靈などと直接交渉する者）を媒介とした靈的存在との交渉を中心とする宗教様式。 ・フランシス・ベーコン：十七世紀イギリスの哲学者・神学者。 ・ルネ・デカルト：十七世紀に活躍したフランス生まれの哲学者。

問一 〓 線部ア～ウの漢字の読みを平仮名で答えよ。

問二 () 空欄 a～d に当てはまる語をつぎの ア～キの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

ア ところで イ たとえば ウ まず エ したがって オ そして カ しかし キ しかも

問三 () 空欄 I～V に当てはまる語をつぎの ア～クの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

ア 非日常的 イ 能動的 ウ 歴史的 エ 本質的 オ 慣行的 カ 一般的 キ 支配的 ク 受動的

問四 〓 線部①「狭義の意味における経済学の枠組み」とあるが、この文章での意味を別な表現で述べている箇所を文章の後半から四十字でさがし、初めと終わりの五字を書き抜いて答えよ。ただし、句読点も字数に含む。

問五 〓 線部②「自然資源の利用にかんする社会的規範」について、つぎの i・ii の問に答えよ。

i 具体的にどのようなことを指しているか。つぎの ア～カの中から適切なものをすべて選び、記号で答えよ。

ア 自然資源のすべてを取り尽くさず、残すこと。 イ いちばん先に見つけた者がすべてを得ること。
ウ 協力した者全員に公平に獲物を分配すること。 エ 自分が得た自然資源の情報は秘密にすること。
オ 獲物の繁殖期間内には捕ることを禁ずること。 カ 自然環境を破壊せずに保全し、維持すること。

ii この部分とほぼ同じ意味の別の表現を文中から二十一字でさがし、初めと終わりの三字を書き抜いて答えよ。ただし、句読点も字数に含む。

問六 〓 線部③「自然と人間との間の相関関係がどのような形で制度化されるかによって、人間と人間との間の社会的関係もまた規定されることになる」とあるが、「伝統社会」では「自然資源」をいかに利用し、どのような「社会」を構築してきたのか。文中の語句を用いて五十字以内で説明せよ。

問七 〓 線部④「人間の【あ】が自由になる」とあるが、何が自由になったのか。漢字二字で考えて答えよ。

問八 〓 線部⑤「近代キリスト教の教義が、自然の神聖を汚し、伝統的社会における自然と人間との乖離をますます大きなものにしていった」とあるが、なぜか。その理由にあたる部分を「をしなかつたから」に続くように、文中から四十字でさがし、初めと終わりの五文字を書き抜いて答えよ。ただし、句読点も字数に含む。

問九 〓 線部⑥【い】をかける」とあるが、【 】部分に漢字二字の語を入れて、慣用句を完成せよ。

問十 〓 線部⑦「数学的な法則」とあるが、この文章での意味として適切なものをつぎの ア～オの中から一つ選んで、記号で答えよ。

ア 数多くのデータを集め、それらを分析して導き出した法則。
イ ささまざまな出来事を数値化して数式として導き出した法則。
ウ 決まった定義があれば機械的に同じ結果が出るという法則。
エ 少数派より多数派の意見の方が絶対的に正しいという法則。

